

研究主題 「自他共に認め高め合い、自己肯定感を育む道德教育の探究」

主題設定の理由

平成27・28年度の2年間、文部科学省「道德教育の抜本的改善・充実に係る支援事業」の委託を受け、小・中と家庭・地域で連携し、地域の実態や課題に応じた特色ある道德教育の実践的研究を行った。平成28年12月2日には研究発表を行い、道德の授業におけるTTのあり方や家庭・地域と連携した教材の活用を提案することができた。

平成29年度は、この2年間の研究をもとに、「学び合う活動の工夫」「道德的価値に迫る発問の工夫」「生徒の思考を整理する構造的な板書」「TTの在り方」に研究の重点をおいて、道德教育の探究を行った。6月、11月、1月と3回の公開授業を行い、研究の重点についての提案授業を行うことができた。

この3年間の成果として、「道德の授業を楽しいあるいはためになると感じているか」という質問に対して、感じている生徒の割合が全国と比べて高かったことである。その回答理由として一番多かったのは「他の人の意見をたくさん聞くことができたから」であった。これは、学び合う活動などを取り入れた授業の工夫をしたことで、生徒自身が考えを深めたり広げたりすることができたことが要因と考えられる。また、学習する道德的価値を明確にし、学習テーマについてじっくりと自分の考えを深める時間を設けたことも、道德の授業に意義を見出している理由と考えられる。更には、毎週の道德の時間を確実に確保し、効果的な指導方法を教師間で共有し、工夫していくことで、生徒たちの道德の授業に対する関心は高まり、道德性を育むことにつながったと考える。

しかし、「自分には良いところがあると思っている」という質問に対しては、「あまりあてはまらない」と答えた生徒はまだ半数近くおり、*自己肯定感の低さにつながっている。成長に伴い、他者との比較において自分を捉え、劣等感を感じたり、他者と異なることへの不安から自分の個性の良さを認めたり伸ばしたりすることに消極的になったりする姿勢の裏返しではないかと考えられる。自分の短所も個性の一つであることを踏まえつつ、自分を受け入れ、新たな自分の発見へとつながる道德教育の充実が必要になると考える。

また、本校の生徒は学力が伸び悩み、学習意欲が高まらない生徒も見受けられる。そのため自分にはできることがある、自分は成長している、自分には友達と異なる面もある、自分には良いところがあるという思いから、自分自身を唯一無二の存在であると認める*自己肯定感を高め、自分は集団の中で役に立っているとか人のためにしていることがあるという*自己有用感を高めることが、学力の向上にもつながると考えられる。

そのため、学びの基盤としての道德教育を通して、自分だけでなく他者も認め合い、自己肯定感を高めるような生徒を育成したいと考え、本主題を設定した。

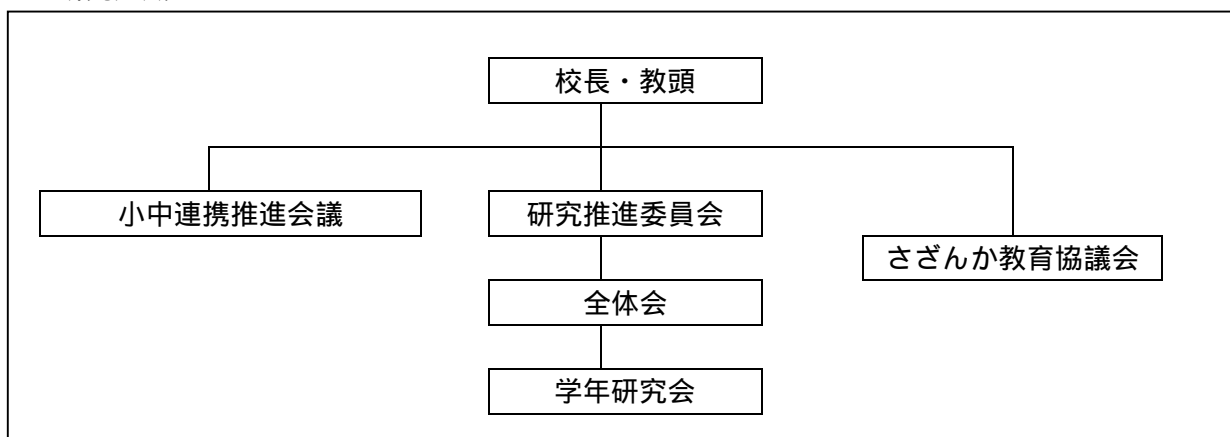
*自己肯定感 = 自分には良いところがある、自分は～ができるなど、自分を肯定する自己評価

*自己有用感 = 自分は人の役に立っている、他者に貢献している、人から感謝されているなど、他者との関係をふまえた自己評価

研究の重点

- ・「道德科」の評価
- ・生徒同士が自分の思いを表現し、多様な価値観に触れることができる学び合う活動の工夫
- ・ねらいとする道德的価値に迫る発問（テーマ発問）の工夫

研究組織



年間計画

月	計画	内容
4	・第1回全体会	・研究の概要、テーマ、方向性、組織について
5	・第1回QUアンケート ・第2回全体会	・今後の計画、授業研究会について
6	・第1回授業研究会【代表授業】 ・第3回全体会 ・ふれあい道德 ・第1回小中合同研究会	・公開授業 ・授業研を終えて、今後の取組について ・小中連携を通じた、学習規律について
7	・第4回全体会	・1学期の振り返りと2学期に向けての計画
8	・第5回全体会	・1学期に行った授業の評価
9	・第6回全体会	・授業研究会の計画
10	・第7回全体会 ・QU検査〔2回目〕(31日)	・授業研を終えて、今後の取組について
11	・第8回全体会 ・学校訪問(15日) ・第2回授業研究会【各学年】(30日)	・公開授業
12	・第9回全体会	・今年度の分析
1	・第3回授業研究会【各学年】(19日) ・第10回全体会	・公開授業 ・今年度のまとめ
2	・第11回全体会	・本年度研究の総括と次年度研究について
3	・第12回全体会(15日)	・次年度の研究の方向性について